倭訓栞中編 十

志之部

和書門
類
三六七二三
號
一二三
函
二
架
六四
冊

内閣文庫
和書
類
三六七二三
號
六四
冊
二六二
函
二
架

内閣文庫
番號 和 36723
冊數 64 (44)
函號 263 7

国立公文書館
National Archives of Japan

昭和館図書

倭訓栞中編巻之十

洞津　谷川士清纂

志の部

あく　氏姓ノ鹽飽也書ノ東鑑ニ見ヘタリ讃岐ノ鹽飽嶋ノ人

あん　思按ト書リ倭語也

いく　牲獣ノ肉ノ中ノ赤キ所ノ人家ニ入テ多ク牛馬ヲ牧ス所ノ名ナリ筑紫及周防ノ在ト我ト貝原氏黒告ヲ訓ジタリ

いさ　生昔ノ約言ノ如シ

いさよふ　詩歌ヲ作ルヒヲ云ヒ辞ナリ①思ノ侯乃日記ノ御遊ナリ先詩歌ノ御會アリ詩ハ絶句歌モ一首ノ外別孫ノ作文ハ三月ナリ②御製ヲ作リ合ヲ考ル詩ノ志ヒ

いつ　四時ヲトヽ来ルヲ足利学校ノ名ナリト云

倭語に死を忌ことあり故に一日を十二時五日を六十時を甲子に一周して一候とす一年三百六十日を七十二候也三候を一気とす気十五日二時五刻余也六気を時とす九十一日余也時四を一年とす春夏炎冬あるも也

△ちろり　袖爐の音袖香爐ともいひて西京雑記に被中香爐為機環轉運四周而爐体常平とひ美人賦に金鉈薫香とゝも鉈香毬也

ぢろりん　澁面にて皺ありしかぶとゝいふ

さゝばぢゝめんかゝべし或は皺面ともいひ天名精の一名皺面草といひ又字書に佽醜面也とゝえり

△ちと　山犬の名なりといひて○蓬ふいは紫鷄と書

○魚の名ふもとゝ○ちと山は越中又加賀能登に跨まり

延喜式能登國羽咋郡志乎神社ゝえり

ちとせ　神事に用ひ塩折ちとゝ

ちとせに　倭名抄に見る紫苑の音也といひて衣の色ふいに八河海に表すゝ裏ともきゝ也とゝえり古今集物の名にもちとせとふ母ひなしとゝ葉小ゝ柔ゝ白花なりと姫紫苑と呼り女苑とも黄花のものは黄苑なり釋名の青苑もまた別種也花の色緑也○反魂草も同類也本草にゝる色ちとせりゞ　柴折戸の家なるへし○今昔物語に押立門といふもゝえたり

△ちかく　若とよゝり又ちかくもよゝり若是の義あり○續日本記に信覺ちかくとゝえり琉球の八重山嶋の古名今石垣の遺名存せり星槎勝覽に重曼山といふも亦是也といひて

ちかけ　弦といひて

ちこう形　源氏にゝる色の形りの略語なり○筑紫にて

ちのもゝいは　ちゝ也といひて

志がの○　松前の方言昆布をさしていふ根といふや
　ある志がの○とよめるもの上品也
志こゝ　俗語也為方の義なるべし修方訳もを
志ゝうく　兜鍪火舎なといへり獅噛の義なりと聞けれど
醜女の義転訛せる也といへり火舎といふハ禅書の捧爐神也
○俗語の志がのゝ流くといふも是なり乞そるなり色し
志が法　法糅をつらてとさへり南部りて陸氷といふ
志ゝのい　五節なとれあり絲鞋の音にて亭子院哥合日記
　ゝもうんえふり
志がい　自害をとふるり○自刃といふの和俗なるべし自尽
　ともいふ○
志がらき　近江甲賀郡の郷名也今も此陶器茶茗
　に名あり○聖武紀に造紫香楽宮といふものハ牧村也今内
　裡野といふ

志ゝのまめ　鹿豆の義野鹿好て食ふともいふ信州に
　多く生す
志ゝうむね　屍骸といふ霊異記に志ふかむねと見ゆ○え
　我に分い也といふ骸とかうけるをとちをらといふ
志ゝのらず　否就ともあり不然の義也
志このくび　琵琶の名所也鹿首と書り
志ゝのぐさ　姓にいふ鹿草と書り異本太平記に鹿草公相あり
志ゝの形のゝ　然なるのゝさなのゝに同し
志ゝの浦がり　飾摩紺の義志ゝ浦のかちといふも藍染也と
　いへり志ゝの浦ハ播州の郡名と奥州の郡名に色麻といふもて
　もに志きれ事を転して志ゝのといふなり俊成卿
　たのまれハ志ゝ浦のかちの色をそふよあひそめてこそくなりけれ
　飾摩川の川上と藍染川といふ是也即伊和大明神の御手洗川
　にて中勢の事よ

水とは誰のうなきとあれども
ものみせよ　錢の事ふいて傳ふ也
ものはくるま　鹿車といて奇よりむハ多く法花經の
とへといて
ものの　鹿野苑といふ梵書にて元字りものの
ものもいて
ものの　鹿ハ胸にて繁木をかき行るやいて歌ふ
情をも散やはらぐんさと　鹿の胸をけ〻する秋萩の也
ものはるるつれ　鹿の袋角と鹿茸といふ形ものの袋に似
もり夏月に角を解て茸をけ〻　茸角で角とせり
ものれるハげのほ〻　秋よりして鹿の上毛に星の班文乃あ
るるといふ夏の初めつるハ毛さらさらるハ鹿のうハ毛
のうのりぼ〻ともいるりといて
△おぐ　時宜の字漢書にて俗ふ時宜作法といるハ語の

轉して辭讓の義とあれども也
ものきか　頻繁の義より轉して事と為截といふも也
ものきみ　倭名抄ふ闘〻闘とあり　敷蹈の義より俗よとぐき
みともいるいふ靈異記に闘をとぐきみとよる新撰字
境ふ梱をとどきとよるり今ハ略して門きとのもいて俗ふ
ぶんとものきおるいハ訛まり羽州にて門きといて　○靈異
記ふ端坐をものきみとおよるるり心得のう　○ものきみ
るいふ禾ハ莽草と訓り或ハ樒とよるり俱ふ和名抄よる也樒
ハ正字通かとん擿るに此よ産まる物にもるえも木密乃字
法花經ふ也るるとも樒字を借用てよるる事ハしといて字
紫集抄よものきるハものといふ初めるるる也甚紫の義きといふ
りや又実ふ毒あれも悪き実の義とといて実乃ものなるす枝
葉も毒あるるて魚と殺す事ハ乎雅よるるるとかやまるものの
俗字メセるるもるるり浮屠氏乃香花ともに木を用るる

未すれハ香気猛く羅ヨ挿ハクふ堪ふとてあるくし遠
江ふ香ちを又香の木周幡よ如の木江戸ヨ如ちをうも
呼り神宮ヨてハ墓所ふも賢木ヨ用うふれハちきみも
賢木乃意ちをうちをハ木と要くせーうや今信濃乃国人の
神宮ふ参詣するふちきみと買て帰ちをもとうう人くへ乃
をやけうすしをこもまくふ木とうちぐくしうや又笘根ヨ
て小田原の間ハ正月の門松ふもくくちきをと用ひ来まり愛宮
山のちきをも家ふり多う事ヨて方輿集ヨ
あくで山ちきみがふうをつりむつむ人の跡をんもせー
○大双紙ヨちきをの木とけつうてすれハ朽さう墨の水とよる
ふとーくいつり○深山ちきを吉野詣の地ヨうん四ちきを実房代
ちをせり茵芋也くいつり
ちきや　茅紫集ふさすたん小屋のちきやとうん四倭名抄
ふ助鋪とこやくくもをくきやくくも訓せり鋪屋の訓ヨや

ちをさて　儀式帳ふ敷簀とうをえをり
ちきぢ　神代口訣ヨ敷地と書り宮柱大敷立てとひ大殿
祭祝詞ヨ此敷坐大宮地と意也榮花物語乃哥ヨ
ちきぢ　唐六典ヨ職事官と散官よむうくていうされバ昔
ハ諸官の當官の事をいふと中古以来ハ藏人乃事とい
ふふかれうを藏人ハ辨官ヨて職事と家ふり○琅邪代
酔ヨ唐制有行守試之別職事高者為守職事卑者為行
未正名命者為試くいつり○續故事談ヨ嵯峨天皇遊幸と
ぬをを殆ひちをぐ嵯峨の離宮ヨまーぬ或ハ政事あをを空位と
朝堂ヨ設け五位藏人と其側ヨ居くしめ群議を聴て奏聞
す也職事乃由て置所也くいつり
ちきせ　四季施くあヨ書り時服の意なるくし延喜式ヨ
季禄ちくえをう意くいヨ作令者の義也いつり
ちきまさ　神代紀ふ重播種子とうを式ヨ頻蒔と書り

重くさゝを蒔といふこと第集ハ
人のうゑ田ハうゑ田ハうゑて今ハ国ゝうゑて切ハいのせん
天津罪の内なれハわくいとゝ
おきとゝ　神代紀ニ扶疏と訓せり古ぶりも紀の義
こけり反き文選の註にも扶疏ハ枝葉四布貞ゝうゑゝ
おきもや　式社の音也延喜神名式ニ載りと式内ゝ載
さゝ式外とすゝりこれ名目あるもさゝれゝ安藝國ニ三座
大薩摩國ニ二座小信濃筑摩郡ニ三座ゝゝめき他ノ國
他の郡ニ准ゝゝ古語拾遺ニ至天平年中勘造神帳中臣
専権任意取捨有由者小祀皆例无縁者大社猶廃ゝゝ
ゝもかゝる故といふ
おきぞハ　江次第ニ敷韋とゝ也敷皮ハ鹿の夏毛と用ふ
ゝ小笠原家の記ゝゝ也神代紀ニ海鱸皮ハ重と敷ゝゝ
ゝゝ起りなるゝ　ゝびかゝ白毛ゝの名ゝ

西土ニ皐席豹席熊席ゝもゝ也
おきもの　鋪設とゝ物の義ゝ○席筵も同ゝ藉と
おくゝとゝ草を下ニ布事也されハ下おきの事也
といふ
おきゝろつ　直綴と書ゝ古僧服ハ褊衫裙子ゝ後世
上下を連ゝて直綴ゝ呼ゝ
おきゝざい　人家ニ客を迎送ゝ禮を設ス處を色代ゝ
ゝ人ニ揖禮ゝゝ事ゝ盛衰記ニ色代
ゝて矯飾ゝゝゝ車鑑ニ前武州不可然之旨有御色
代之故也中ゝ見ゝ色ハおもゝゝゝゝ顔氣ゝ又式代
ゝも書ゝ著聞集ニ色ハ礼式ゝ代ハ古ゝ何ゝもつけて
ゝゝ或ハ式墨ゝ書ゝハ本義ゝあゝ○式代ハ柱をうゝ
ゝて向左右ニ壁ゝ壁あゝハ非也ゝ○庭訓ニ現物色代
之償ゝゝゝゝハ品色の物と其代ゝゝすゝゝ

おきろ〳〵　常に食籠とかゝり武備志日本考に
食籠あり
おきぶすま　延喜式に敷被と見えたり
おきのもて　建武年中行事に式筥とす江次第に入内
裡儀式也とえり　正月の事也
おきおや〳〵　東鑑大神宮年中行事及長明の東紀行
に職掌と書り或八式正とも書り
おぎ〳〵川さハ　鷺の立澤といふ矢倉相模の国大磯近き
一處の名とせしハ後人の所為こゝいふ家隆卿ハ沢辺略也
よゝり雅章卿
秋ちかぬれども神よもすがら〳〵時雨の沢の黄葉て
いとゝ落ひしと略の羽打ちかしし秋の夕暮ゆ
んハいつもの所ゝそうのもとあ〳〵もらん此地のこと
あそれなるやゝ勅ありしとうやその後為人は冥加下向乃

時よゝ落ゝの
おもとのゝおきおもとゝ泳置ハ世よんあきゝ人といへん
おきのゝ時の羽づゝひといふ泳仲西歌に
ゆ所の略のゆりハかきつゝんゝ并もりけきあもすゝふ永
△おぐま　日本紀新撰字鏡和名抄に羆と訓せり白熊の
義爾雅に熊に似て黄白文といり一説に四ゆ似ひ熊に作ふ
ともてよゝるゝといふ小國ゆ乞ゆ事貝原氏の書にえゝたり
大熊ともいふ○たゆきの於ゆおぐまあり毛色黒く凡熊の如
し熊は必そつちかひといふもの
おくち　大河ゆ産もの又江海に山に土龍ゆてすくちといひ
京にて伊勢ゑびといふ鯉ゆ似又川鰡ゆ似きやもみもいふ
唐山の俗鰱魚といり又朱口といふ口紅といふの如
おくおゆ　俗語也為扶の義おくおゆハくぢくといふ如
おくつゝ　詩経の沮洳此意也といり

〈おけ〉　寺家日本紀ニ云ヘル三代実録ニ寺家女赤須
とゝ云ヘリ寺の家人也桓武紀ニ寺家田地ともいヘリ西土ニ
いふ寺戸也
おけら　天隍より轉して湿地をもいふ也おけ〳〵とも
も同
おけど〳〵　引ふいふ重藤（シゲドウ）とも云ふおど〳〵巻意ホヘし
おげこき　古事記ニ見ヘおげきを也こき反きを也
おけいと　和名鈔ニ絃をよめり悪糸と註せりふときぬ
ニおけとりいとも見ヘ或ハ裾絹とよめり新六帖ニ
祇園ハ橋のおけ糸ゝうゆ〇ていとの形ふつ上ニ見ひらゐん
おげせま　木の繁き山〳〵并代紀ニ離山と書ふ同義ニ
おげのわ　滋野井と書り勘解由小路と中御門との間の井
とゝ云ヘリ〇地下ニ滋野氏あり盛衰記ニ云ヘる
おげいさ　淑景舎ニ桐壺ニいヘり

おげめい　源平盛衰記ニ滋目結の直垂と云ヘるあり滋
き目結ふ〳〵
〈おご〉　俗ニいハ自己の音也〇おぶんハ自身也
おごゝ　俗語ニ自業自得かといヘり
おごち　諢名の義也目字とかつけてとよめる意ニ云ヘり
おごめ　日本紀ニ醜女ニおごめ又魅とよめり和名抄ニ
黄泉之鬼也と云ヘるあり
おゝこ　源氏ニおゝこりてゝいふ畧語なるべし　押凝の
義也
おごゝ　俗語ニおごゝとこくしいふ義ニや〇東國ニおごきと
云物を畿内ニかゝえぶゝしと云肥後ニてはそゝ云
おごろ　倭國軍記ニ自骨とかゝへり
おごろ　祝候の音あるべし延喜式ニ云ヘる
おごめき　神代紀ニ凶目杵とよめり醜女ニ同しかる

れ汗穢を見て目をしかむる意なりといへり憂目辛目なとも
目ハ見るより出てかゝる目にあふをもいへり
しこぶち　醜太なるへし壒嚢抄に物のけぎらしき祇なるか
をいふといへり日本紀に齋部色弗知といふ人あり醜淵神祠を
愛宕郡久世莊にあり
しこりてゐん　萬葉集にしきりてある也もとゝゐ重将来哉乃
意也
しころさる　堂舎の今に四方しころざるといへり
しこれへい　黄蘗の宿にえ東国乃方言なし骨菱労熱を
治すといへり
しこのしこづて　萬葉集に鬼の四豆手とよみたり
しこのますらを　萬葉集によみたり醜の丈夫醜男と
いふ也へし又しこほとゝぎすもよめり○又大君乃しこの御
楯をよめりしこ吾ハともみえたりしこはなも同意也

△しさして　とのゐをとかしさしてさぬといふ抱朶紙にみえたり
つゝさの部考ふへし
しさハ　播磨の郡名宍粟とよめりしかの反さ也○甲斐の
郡名に石禾をいさはとよめり是もしあの反さなり
しさし　字指の義高倉院の御時清原頼業始て献上す
例として竹を用ゐる法ありといへり又字つきといふ字衝の義
也長崎に豪猪毛を用ふ唐山の俗に倣へりと称し藝文類聚に
以経撓之とあり又清原家に学力と称するあり字指の
類なり
△しさう　伊勢物語にしさうの官人とみえたり其名本に
祗兼と填せり三代実録にも今世にいふ馳走人也官人とは
いつる郡司或驛長なとをさせり○しさうのほしといふハ北斗
七星也第七の揺光を破軍の剱鋒といへり北斗延命経にみえ
たり

ちさい　子細とちり杜詩北史なしにてえて俗語なり
より楊升菴に見えたり○俗ふちさいらしくてふ
すちやりなどといふ
ちざい　自立と書り王嘉傳に身を鑵子と釣し低昂
と自立する意し西土よりいへる活套也
△ちくり　試周と書り元亨釋書に試周之日本註に宋
俗迎兒産朞日行試業猶如本朝三歳試問とえたり又國俗
兒生三朞試問先身多有言也とえたり今此事と関す
ちくり　時衆と書り一遍上人の宗流也嘗て隆蘭溪に法
を聞て遊行流ともいへり第十二世八後村上院の皇子尊観法親
王也よりて清淨光寺の現住を南門と称す南方の門跡といへ
るを一遍上人々伊豫國阿野七郎越智通廣の男也後宇多帝
の時相州藤澤に清淨光寺を創むしを
ちでむ　縮とよめり繁緊の字なるべし　新撰字鏡に蟠代

ちまきのこと　ちまきのこと　万葉集に猪鹿田とよめり山田の体といひ荒
木田の宮田とよめるも同
ちくむ　新撰字鏡に戴とよめり大纓也と註せり
ちたちまち　時處位の三字也軍家にいへる也
ちちこび　宗道卿八天平記にえて出雲国也
近江栗太郡大石村の川の岩がどすがどあるとも
て鹿飛巌とす古へいへる大石関さて谷をとも坎處と指
り享保中湖水干ちて湖邊九十九浦より勢田川とな
るべし○ちちこびそはは蘆茹也といひて前漢地理志に茹水在
上谷郡茹縣地多産蘆茹故名とえたり
ちでらき　倭名鈔に緘とよめり縮むふ乃意之桃花茲
葉よりちでらの綾とえたり今もちでら嶋といへり○海中ふ
ちでらり所著なりといへり

しがらき　桃花紙にしがらかくるかくと見ゆ縮める紙
といふ名ハ紙のもつれあひしがらかくと見ゆるなり

しゝさけ　神武紀に牛酒と見えしハ漢文乃まゝ也書さ
れたるものにて酒肉の謂也牛ハ神代より食ハざる事古語
拾遺にも見ゆ○四国なる山中に麻の肉を腐しさるをいへハ
さも濁りてハ猪鹿をおどすの用とす

しゞく　新撰字鏡に擷の字をよめり字も訓も心得
ごゝろなし

しゃく　慈石の音なり續日本紀に近江國献慈石とみゆ
今諸州より出て信州の物上品なり方角を質も器を称する
も慈石と針につけたるをもてなり子午盤針是也磁針ともいふ
いふ羅経盤も同し蠻人呼てらうきんとよぶ羅経の音なる
へし石乃頭ハ北を指し尾ハ南をさせともて針の本にひてまつ
まつの尾をすれハ針の先北をさすとなり

しでこの　万葉集によめり二名といふこの乃名也
よりて膝折伏ともいひ拝ともつくり

しびしほ　和名抄に醢をよめり肉醤の義也三代実録
に鮨蟹(ノシヒシホ)とみえたり

しじうでん　仁壽殿也といへり仁壽宮ハ隋書にみゆ

しじもかう　十種香ハ栴檀沈水蘇合薫陸鬱金白膠
青木零陵甘松鶏舌の十香なるよし卯海にみえたり今宗
いふもそれに本づけり

しぜんゑん　神泉苑の池ハ徒然草に見ゆ北史魏孝文帝
紀に起永樂遊観殿于北苑穿神泉池とみえたり

△しすゑ　尻居とみゆ孳子ハ青瓷之尻居也といへり○
俗にしすゑるといふもそれより起るか

△しせつ　使節としり節ハ節刀の節にかはし符節の義也
庭訓に入部使節とみゆ

△ちそく　紙燭の音之倭名鈔ニ云ふ類聚雑要ニ布紙燭
云ふ唐書ニ以燭淚濡紙継之云云又脂燭ともろ出
御の時殿上人の役ー御蔵の調進するハ杉のわそ木と青紙ニ
てまきたるもの○藻塩草ニちそく色ハぬき紅さて紫なり
いろ

△ちぐさか　日本紀ニ垂の字をよめり下葉乃義也ちぐさ
尾ハ萬葉集ニ四垂尾と書ちぐさ柳ハ垂柳ともいふ群芳譜
ニも云へるもちぐさ　揚を伊賀風土記ニ垂櫻と書り西土
ニ垂枝といふ

ちくむ　童蒙頌韵ニ釀をよめり汁蓄の義なるべし日本
紀ニ漉もよめり

ちくめ　祝詞ニ天下を知しめさんと云事のしるしとよめり
ちぐん　元亨釈書ニ師檀と見え盛衰記ニ師旦の契と云へ
る僧俗なる也御師檀那の義なるべし伊勢両宮の祠官

家にちぐんと言ふなれり

ちくさも　顕昭の説ニ女の紅紫のたてのはかまをいふきぬの
下ニきるハちくさ常ニちりとりとよめり遊仙窟ニ紅の褌
とよめり褌とちくさもよめり新撰字鏡ニハ褌をちくさのも
の陰ニあり後宮名目ニ御ぬぐのるもの未ハてハおやも
とおもしやかハ無下の宋ニ為家ニみやこも宋の宮とい
ふひるもまつりて御産湯ひうせおーまーかるとれ
波ちすの松の下ニ常ニ代とかれてきかーせ交歌の多
ちぐさ

四道の儒ハ紀典明経明法算道也職原鈔大学寮
の下ニ見ゆ紀傳ハ歴代の事実と考へ明経ハ経義と穿議ー
明法ハ法度と教へ算道ハ算術の道と法をとる各其家あり
庭訓ニ紀典仙経儒者ニ云ふハ仙経恐らくハ明経の謬なるべし
明法明行道とあるも明行道ハ算博士の事なるべし
ちくさぢ　和名鈔ニ墻壁類ニ助枝を訓せり下筋の義なり

べし功程式ハ志達とゝ四○坏撲子といハ下地の義ゝ○中
山宮古嶋の間切ゝも呼て
ちゝで　歴とゝ　源氏ホ夕顔舌疾の義今ちちやとゝり
ちゝど　下根の義芋ゝ　氷の下ゝ在ゝ
ちゝ○　顕昭の説ホ舟のゝ方ゝ法ゝ多ゝ板とゝ尻
ちゞる
棚の義くゝり
ちゝみ　延喜式倭名鈔ホ籬とゝ新撰字鏡ゝ笆籔ホ
ゝとゝ　ちゝむ器ゝ今安藝ゝ丹波丹後ホいどゝ遠
江ホ四ゝ　越後信濃上野ゝ
ちゝく　支度の字魏志ゝ出ゝ文集ゝ支ゝたくゝ
ちゝおきての條ホ○私宅の字ハ宋文帝紀三代実録ホ
ちゝえり
ちゝい　自脩の義事体の義辞退の義あり

ちゝづる　義楽集ホ秋山の下ゝ妹ゝ名西萎ゝ
ちゝぐる　日本紀ホ無又無落又滴瀝ゝ
り下無の義ゝ零も同　新撰字鏡ホ淋ゝ
ちゝかえ　俗ホ馴ゝ離れぬ意ゝ味のゝハやうゝ
ちゝぐる　もゝり無の字義ゝ也定家ゝ
狩人のゝ　ゝ餌ひゝ
ちゝがき　草菓ゝ草案も同○受領乃下書ゝ
小書出ゝ案也○禹の下書ゝ粉本ゝ
ちゝがゝ　下形の義ちゝ
ありたまゝ　源氏ホ世のおもゝ
ちゝえ　新撰字鏡倭名抄ホ襪ゝ訓ゝ下履の義
今ちゝづゝ　又韈ゝ作ホ袜も同　束帯色目ホ袖
の時ゝ練貫ゝ深ゝ用ホ宿老ハ白平絹乃練ゝ

さう

ちくさぐら　新撰字鏡倭名抄ニ鞦を云フ延喜式ニ毛
鞦皺文鞦かとゝえたり今の切付くゝいて又和名抄ニ鞦を
俗ニいふ駒鞦と云ゝたり○延暦十三年應禁斷犢皮鞦牛
之用在国功要負重致遠其功實多今聞无類之流爭事驕侈殺
剥班犢競用鞍鞦及胡錄等之具為弊尤甚事須禁絶

下萠の義抬紫の下まめ〻しくをいふなり㊀下
萠の少將と呼ハ二條院の時の官女に夫あるわつらひ比
ひとゝあるかけきをきをいたもちゝせたゝ火の祇のちゝきくに
とよみ中ちを若さ切ちうとゝいひたゝ火の祇ハ隱岐よりち
ちゝ〻　ゆう治拾遺ニ入ゝ孫うぎぬのやゝ〻ふちゝゝと
ちうたうとゝ㊀
ちゝゝう　歌古の義也ちゝづみともいて
ちゝゝなま　古事記の音あゝ㊀下注の義を引歎くといて

ちゝがく　衣ふいゝ下交の義なりゝ〻〻紙ニ見ゝ人魂歌
たまハゝゝゝハ誰ともちゝ孫ゝも詰ひとゝゝちうちゝゝのつま
此謗の歌古き口つきの歌よあゝゝとといて○横衣ち
あくかゝ秋魂もかゝてちうんちゝあゝうふ詰ひとゝゝちゝよ
君
たまゝひの通ゝあゝうにあゝ祢ゝも詰ひせせ手ゝ下ゝうのつま
待從歌
君ゝゝとゝうきゝゝう玉のさゝゝけていう形ちつまふ詰ちれもん
此等謗の意なり
ちゝゝゝも　自他俱の義ゝ楞嚴經ふ分別自他と云ゝたり
ちゝゝきまく　漢書ふ禮官博士卷其舌而不談と云ゝたり
ちゝゝゝぎ　鵝口瘡をいゝゝ舌ふ粢のれきあのいつゝたり小兒の
疾ゝ
ちゝゝゝの　西土ふいゝ茹也といて

ちさけうち　日本紀ニ地道トヨメリ
ちさすだれ　車ニいゝ真名伊勢物語ニ帷裳トヨメリ簾
のちさふ白き絹二ちぐ或ハちさそそ濃ゆしてかつふかりとそそ和
名抄ニ幌慊俗車簾車帷也トいゝあなりといフ
ちさつくふ　祝詞ニ下津國トゝ白上津國ニ対しいフトヨモツ
くふをいフなるべし
ちさづくゝ　天徳哥合の序ニ机トゝ也
ちさのおび　東帯の下ノ帯なりといフ古今集ニよちされおび
のたくなえをり道の枕辞ニいフハ神代紀ニいさなきの尊
帯を投棄ひしの長道磐神トなりしなえをり乃義の
神あれハなり
ちさちぢ　ひの下紅紫松の下もぢなどトヨメリ
ちさらでん　梅村載筆ニ震動雷電トいフ今もちさらら
いてんともいフ一説ニ設樂田と書といフ○参河國設樂郡と和

名鈔ニも志だゝとよあり百練抄ニ設樂神自鎮西上洛といへ
ハ紫野の今宮の事也又京中兒女備風流調鼓笛参紫野社
世号之夜須禮トヨメリやそゝひなり乃祭といなり其章曲今
ニ神家ニ祕せり志ゞゝこひしの倍あり内宮年中行事ニもちゞゝ
ともいフトヨメリ志ゞゝハ拍手也といフ設樂ヨメリ此義也
漢書張禹傳ニ置酒設樂ヨメリちゞハせうの轉也
ちゝりがや　栄花源氏和泉式部日記ニふえをり野槌
わちりとふ貝也トヨメリ後京極殿哥
ちゝかゝぬき　霜降須韻ニ鞴トヨメリ
ちゝとふゝ　童蒙須韻ニ掉舌以為不可ヤ
事と肯ハぬふいフ唐書ニ掉舌ぶりもヨメリ
ちゝまとおとゝ　下ニあとおとゝといフ
△ちち　桓武紀ニ百質の音ニ十訓抄ニちちふれくゝちと

かりたくとゝのえもとゝのふ也又贄と同しかも也ちつの
ぢハ気質也○質物やいゝ字書言故事ニ見えたり○ちちや
ハ典鋪也

ちちく　紫竹也續拾遺記ニ見えたり

ちちめ　俗語也實面也といふ

ちちや　生誕七夜の賀ハ令ニ見えたり又三夜五夜七夜或ハ
二夜三夜四夜五夜七夜の賀儀ハ東鑑ニ見えた又生産後三日湯
始と稱して賀するあり

ちちたゝ　七嶋と書り薩摩国隼人閑書ニも見たり

ア七嶋蘭七嶋ありてかゝいふ

ちちや　仕丁也日本紀ニつかへのよぼろとよめり使令の夫役

侍臺所ニて諸事ニ仕ハるゝ下部也○海人藻芥ニ裝束ハ親王
大臣家ハ退紅公達等ハ白丁也とえた

ちちよゝ　伊勢物語ニいとまめニおちよゝりてとゝ見えた

ア真名本ニ實用と填られたり

ちちアん　爐の類をいふ七重と藥を煮酒を煖むるに便利
ありとゝもて炭の價銀七重ニて足るべしと名くやいふ

ちちやゝ　使廳と書り検非違使の廳也又圍碁ニいふ
四張の屏ニや征字を譯せり○紙帳の字事文續集ニ見えた
あり

ちちぶんゝ　七段花也甲州ニ重てはりとゝいふ籧篨柴也
といふ花の色みどりあり四ツ一房ニ数百花つく葉莖彩
ぢりて衣ニつけてもかれぬべしといふ

ちちぢゝさゝ　七重草也花ニ五色あり咲分ありて七重
まてふ咲り伊豫ニて九輪草といふ

△ちつど　執事也北條の時問注所執事政所執事見えた
尊氏の時も執事の職あり

ちづえ　古事記ニも下枝とちとえともよえり

ちつけ　禮容を教ふといひて摸とよめり躾字は倭の俗字
也ふつけとよめるもちつけなるべし
△なるべし將軍義滿公の時乃禮書十二巻これをおいけづくの
書といひ○衣服おいかも同義なり○尻付の字名目抄にうを
○北山抄院宮御給の下に其助若名謂之尻付といひ
ちつけ　習気の音といひ習氣は梵書にうを四教儀集解
に習即慣習氣謂氣分とあり○口語ふいに湿気のちもあり
おつし　十死日也凶日とす○十死一生の語は賈子新書に
見えたり
ちつこのい　悉皆の音也西土の書に多く皆悉と用ゐ
ちつこし　俗語也ちつけ濃き意なり　ちつしもいひ正総に
くろくけるいといふ
おつとく　服はいと直綴の訛音なるべし褊綴とも称せり褊衫
とも出たるも名なるべし又十德と書るより八德の制も出たる

なるべし亨禄の比より侍の服にも八德を用ゐ也出羽よ
て羽織と十程と云も十德の訛音なるや○大双紙に十とも
古へは葛とも云ふも又黒くても用ひ上に帯とす又奉公人
なれば犬追物乃見物なども時素襖袴の上に十とも
とも云すもし呼入るるれは十德をぬぎてえぼしときて出
る十とも八禁制の内なりとも中山傳信録に醫官王
宮執茶役者司灌園者皆全剃髪戴黒色庁帽外多着短掛一
領比大衣畧短二三尺許黒色にいとものも褊綴を拵ている
るべし○蝦夷人の松前領主に見参の時十德を着すに大双
紙かりにの如きなり
ちつくい　石灰の唐音也といひて石敢當をちつこうんとよむ
このめ石敢當は門神也今ちつくいと称するは本草に以麻
筋和油石灰為之と云是之
△ちつぺい　漆箆也といひて庭訓に竹箆あり字書に箆は去髪

垢者也とゝ禅家よ人と志物よいゝ
志つ〳〵　文よ可賦をふ志つゞ〳〵可善とゞく志つゞ〳〵ふむ
ハ志つ及すゑれハ語と延しゝとゝも
志つぽく　蠻語なるへし〳〵或ハ卓袱の唐音也といゝ又卓子と
よゝくノ丈膳とよゝんゝハ孟子の食前方丈よゝとゝるゝも又ハ
仙卓と訓を八仙人よ据ゝも高三尺余幅四尺餘四方朱漆そ
塗て縁よ班竹と志四隅よ獅子の形の脚あり白ハ小紅白の紗綾
と垂ゝ卓下よ餞餘の物又皮骨ゝと入ゝ器と置ゝ乞と渣
斗といゝ○精進の料理ハ普茶といゝ○巴且国小漂流せ〳〵者
かへゝゝはよ船と造ゝ其材其土よて志つゝくしゝ志ゝ
志つぽり　志ぼゝの俗語ゝ人の気象ゝも志ゝ語のしゝゝも
気のふゝゝゝもいゝ
志つぱり　志バ〳〵の意ゝ志ゝ切字の意ゝ
志つこう　志かゝゝ俗語ゝ物の性小堅固ゝ意よいゝ

志つゝう　志ぐむの俗語ゝ志ぐび合ゝゝ意よいゝ
志づゝも　神賀祝詞ふゝ○忌清まゝりて皇神と鎮め奉ゝと
いゝて忌静め仕奉ゝ受ゝ
志づまつき　賤間月ゝも五月とゝ
志づのいちや　静窟也萬葉集よ生石村主真人訶大汝小彦の
いまゝゝん志つの石室ハ〳〵世ゝ也ゝゝん
元亨釈書よ生石大神よ作ゝ今石寶殿といゝ播磨よあり人ゝも
ゝゝ二神を祀ゝ又摂州武庫山の頂上ゝも石寶殿ありと
いゝ
志づまりまし　古事記ふゝ○鎮坐とよゝて今志小ても唱ゝ
志ふ留り坐て他處へ遷往ゝ給ひ志ゝの事なり出雲風土記
小大穴持命記八雲立出雲國者我静坐國と見○遷却崇神
祝詞ゝも見ゝゝ○崇神紀小鎮坐ハ〳〵ゝゝゝゝ忌竟小
就ていゝ

ちつたくもひ　倭文機帯の義也萬葉集よりそなり日本紀の哥よみもひのちづりくくえたり一説ふ賤の機おりとして腰ゝ
ゝ帯ゝりといふ非也

ちつぽうぼうぐ　七宝流の義大食窯也典籍便覧ふ以銅作身用藥焼成五色花者與佛郎嶽相似とえたり

△ちてんつ　四天王也法華文句よ四大天王者帝釋外臣如武將といへるより古今著聞集源頼光平家物語よ木曾義仲盛衰記よ源義経太平記よ新田義貞かとの臣よ皆称せり徹書記物語よ和謌の四天王と呼ふ頓阿慶運浄辨兼好とそ皆僧なりしもあやゝ○平貞盛系圖ふえたるを平維衡平致頼源頼信藤原保昌也義経の四天王ハ佐藤次信忠信鎌田政盛光政也義貞の四天王ハ粟生頭友篠塚某畑時能由良具滋也弓馬の四天王東鑑よえる武田信光小笠原長清海野幸氏望月重隆也木曾四天王ハ樋口兼光今井兼平根井行親楯親忠也

△ちど　志渡ハ讃岐寒川郡也○志渡の浦淡海公の事とひ海人水底よ入て珠を取ゝ故事を正史ふ
ちゝを　湿をちゝをるもちゝをるもいつりちゝをるハ垂の義
ちゝ　ちゝも音通せり盛衰記ふ水よちゝみてとも見えたり
よちのゝよめをてといふよ同ゝちのゝちゝとて萬葉集
いゝ語を略ゝてちゝ　ちゝゝちゝと重祢
えひをれハせえを茅渟集ふ　ちゝゝといふ也今昔物語ふ肩をちゝ
妹書ふちゝよぬれて呼ふ
○ちゝの岩屋ハ伊豆國ふあり　ちゝの山を源ふえる
ちゝむ　倭名鈔越前國の名よ従省よあり通鑑胡注よ公
服従省服也と見え左傳ふ従其省とえたり
ちどけ　ちどけ　ちゝを略成べゝ無往途の義といふハいと
△ちちの　土佐國宮七月三日の大祀とふ名義詳ふ

しなひ稲乃義にて呼ぶにや古今著聞集に土佐の御舟遊のために都より樂人下りしといへるも此際の事なるべし家隆は

土佐の海に御舟浮べて遊ぶらし都のそらハ雪けしやときく

しなえく 桃花紙にしなと楽しなめきとある此品多くの義なり

○源氏河海に辞多ければ品せしといへり易に吉人之辞寡躁人之辞多しと見えたるに是之

しなのき 科の木也古事記に科野の榜是也其皮のしなくしなやかなるをもて名となせり康ハ葉ハ菩提樹に似て冬木すぐ榜似樗色白しとあるをもて此字をたくと訓し其皮を剥て木綿に造る也又衣袋ともせし紙にも用ゐし成へしされバ神鳳抄信濃國に麻績御厨あり信濃山中に級布あり紙布藤布太布などを出すとぞ神楽哥にも此を造なりしかのなといへり太平記に標木を上紙とも見え稲巻の綱に信濃皮むき千束入べしとハ番匠粗色を出せりといへるあり諏訪神社の御装束及鎧のおどしなるのかざり

船の綱なども用ゐし榜字をよめるハ似侍るべし

しなぶる 俗語にしなりて及びよりてしなびしぼしなびしなとしなびよるといふ也 ○ひしなぶといふ俗語も乾しなびなる也

しなさま 新猿樂記に品玉と書り魏都賦よりて弄丸是也続日本紀に弄玉三代實録に咒擲弄玉と見えたり

しなし 轂字の意しなめく義也 ○しなしともつくるなど

いふも同じ

しなぶくろ 信濃國に級の木の皮にて織て袋とす伊原山中に出すと聞く

しなざかる 萬葉集に越の國の枕詞よりいへり級蹤の義日本紀に塔の九重をてのしとよめるも此義也一説に級坂在と書るを正義とす舊説に角鹿の坂を越るをもて越の名ありと

いへるやうし

ちかがいおとし　或説ニ平城天皇の比武州の小幡の庄より
楔皮威を出せりといふ源平盛衰記ニハ品草威ハ藍皮ニ紋
とし〳〵ちかを也と見えたりちかハ狩せかるゝや
ちかをのまもみ　ト部の書ニ日本武尊東北のひかとむきた
まひて科坂の山中ニやとりたまふ軍衆ひしゝとり宿軍の強し級緒
〳〵宿の弟ニ其弓を取たまひ級の木の皮とりて弦とせしなる
の真弓是也〳〵えをもり級の木の皮とりて弦とせしなる
〳〵さんど万葉集ニみちぐかるちかをの真弓とよみたれバ
そハ謬り侍へしとかゝるもおぼつかなしき
△ちかいる　伊勢物語ニ死没の義也神代紀ニ没をいふ
ちかり万葉集ニいのちちかきとゝえたり
ちかせ　俗語也為似の義字世説ニ
ちかせん　死せんの義ニちかせぬハ死せぬの義ともに拾遺集
ちかえたり

ちかふこゝろ　死水の義ニ善見律有部律等ニ飲苜蓿水而
待死とえたり
ちかする　万葉集ニちかするものハあるゝなせハくいるぶハ
死ぬるものなるゝハの意也
ちかおいぼを　俗の罵詈也後漢書ニ死老魅とえたり
ちかのおかきゝ　佛足跡の歌ニ涅槃経ニ死王不免華厳
経ニ死王到時とえたり
ちかのたぐゝち　死膚断と書り後世云ちかゝるもの類也賊
盗律ニ凡殘害死屍本註ニ焼焚支解之類也とえたり
△ちかゝ　四書正解ニ之遶とえたり○古書ニ亡作辶ニ
作ることの多〳〵厄言ニ如迺作迺匹作迺亜作迺謂之隷變ニ有
此例とえたり
ちかい　新撰字鏡ニ纎とよめり織餘也と註せり
ちかゝ　竹實とゝ西土乃書ニ自然粃とえたり本草

よいよ篠と竹譜ハ竹六十年ニて花を附て即ち枯ると
おもへんこと　自然居士也泉州自然田村の人東山ニ住す
いろ
おもへんおよ　野山藥とハ自然薯蕷なるべし負暄雑録ニ
山藥本名薯蕷避唐代宗諱豫改名薯藥避宋英宗諱曙
遂名山藥ニ見ル
△志のぎ　刀稜とハ鐇とよむハ字書ハ刀鋒曰鐇ニ云ふ
又鎬ハ太平記ハ出られ〻字書ニその義ハ云ふ　本草ハ劍脊稜ニ
ハ見ル志のハ篠きハ又ハ成魚ニ〇万葉集ハ志のきと二つ手挾
ニ云ふ云ハ志のき羽ニて鷹の羽ニて矢ニ上箭也ハいと
志のぐ　陵とよめり刀の志のぎなるべし万葉集
ハ菅の根ハのぎとも秋萩ハのぎともよめり侵陵ハ熟せる
意ニ言塵集ハ志乃くハ云ふ山と志のぎゐと志れ〻なしい
ろ浪と志のき霞ハ志れ〻も同ハ常ハ暑を志れ〻ハいと

晋書ハ常ニ以オ氣陵物とハ云ふ新撰字鏡ハ傲又侮とよ
めり
志のだか　篠棚ハ志野入道宗温ハ造り始め者ハ宗温茶湯
を好ミ香とき〻ハ妙を得ると也
志のび草　杜鵑ハよめり五月を已の時〻いひ卯月とハしのび
といハ志のびハ時を忍ぶといふなり
志のゝや　逢坂の四宮と延喜第四の皇子と云ふひゐの事ニ
延喜より前のなるべし小野小町家集ハ四のゝ宮せきふ
つとよんでゐる
今朝より八かゝ乃文の秋風やみとあハ坂もわしとおりハ
見ぬ人ハ四宮川の事と学ル
志れぶすゝ　日本紀ハ蔡摺延喜式ハ小松すゝ小草すゝなし
見えもれバ志のゝ草の形とすゝ作ると成べしとハ伊勢物
語ハも

春日野乃紫草のすりぎぬ　志のゝめのくれかたまけて　をのがこゝろ　志のぶもぢずりたれゆえに　みだれそめにしわれならなくに

この志のぶもぢずりとつゞくるハ陸奥国ふ信夫郡ある故なり信夫郡ハ石ありて岡部と云所の田中ふあり　いつの比の国より落しいふ志れぶ草のかゝる紋あるをもて結るあるをとゝるハ非あるべしをもぢずりといへるも右の志れぶ草のかゝを乳をすりあるをいふなりと我きれど東鑑にも信夫毛地摺千端と見えられハ信夫を地名とすれども一説あるべけれ　○公忠家集ふ東ふてゝゝ人ふ白きぬと青きものとをもて水をもて火をもて入て煮るをそれハやまあるをそくもれる衣といひたるなるべしとゝ　ひとりぬハなむずりあるとゝ　なるべしとゝ　つゝされと新千載集ふハ朱雀院の御時藤原親盛うかゝあの使ふまうのうゝふ金を火をもちふ沉のほうちをもちのゞずりの袋ふ入るをもてをそれとゝ　後拾遺集中納言敦忠とあるを

上句をもちて結ぶ　おとゝひやいつと故ゆのくなり下句同ー

志のぶゝ　鷹詞ふ人の小便ふ餌をひたして飼ふを云ふ定家卿

紅葉をぶ　榜のをとゝなる志のゝ水をもてあらゝの弯ふをもてをもん

志のびごと　日本紀ふ誄を訓せり哀言の義

志のをつく　五月雨なゝのをげゝきふ云ふ　吉野拾遺ふ云

えをり

志のゝをぐさ　篠の葉草ハ小草の名也とゝ　草ふ淡竹あり

ゝをあるゝ也

志のぶのたの　陸奥の信夫より出る鷹を云ふ

志のびゝるま　隠車の義ゝ紋なゝと也

志のををぐき　磬ゝ吹風の名ゝ　ゝ志のふうゝ風も同義

ある〳〵

おのうつはもの　倭名抄ふ瓷器をよめゝ音ゝ

△志ゞゝ　芝生と書りゝゝの志ゞなゝゝ

おバる　芝居の義納涼なとに よろつ○雜劇家といふも同
義なり延年猿樂より事起るとり慶長中出雲の巫國(カンナギ)といふ
女四条河原より芝居して歌舞伎せしより始りて元和中女樂
乃官禁ありて男倡より変し兼應中官命ありて女形も年
齢を擇ずして額髮を剃除し今の風となりて西土にハ立役
と生といひ女形を旦といひ童戯を淨といひ敵役を丑といふ
とあり凡て役者といふ樂戸の類なり○清康熙皇帝座右乃聯
より日月燈江海油風雷鼓板天地大一番戯場堯舜旦文武末
莽操丑淨古今来許多脚色ゝゝゝゝ板拍板也戯場もおバる
末ハ生の類脚色ハおぐゝ也○奥州膳澤郡よおゝひの社あり神
名式より云志波姫神社也
おゝゝ　俗より竹あとの志ゝゝる胸の志ゝゝるといふ強張の義な
ゝゝゝゝ也
おぐん　繻半也東國西國ともよおぐ ぎやゝいふ關西ハ

おぐつけ紙中よおぐこ東奥よてゝらといふ又夏日農民乃
業ないとなむ者草ゝとて短くびらゝおゝゝゝゝ○肥前土佐
より小兒のおもんをちんことといふ
楽ゝハタ顔さなの下淨ゝ男ハてゝら女ハふゝとのゝて
おゝゝる　支配と書り梁武帝紀より見ゆ支ハ分也配隷也と注
せり○支配人ハ管家也
おゝゝん　鎧の指物より人幟半の義小旗やいふの如ゝゝゝゝ
○四半の小草紙といふ事盛衰記ハ見えたり○的の類ハ
いふを小折敷を四ハ切て用ゝゝ見えたり四半と書り○石
板ともよあり道路より名を書ける
おゝがゝ　咳して痰の嘎(カル)るといふて平家物語ハ志ハの仲麻呂
とゝゝゝゝゝ今俗おゝかれ痰といふり○ゝゝハがれさるゝ
おぐおく　ゝゝふいふ頻啼の義ゝ萬葉集ゝゝゝ

ちばぐり　初雪のふて後ハ雑をいをとり赤くの実也

ちばのと　柴門をいふ石戸氏の詠

おのひてのすゝとハいたゞ柴の戸ハ月も有りけるもあり

唐詩ハ草舎隨時有月花○柴垣ハ大嘗會ハ用ゐさせ給ふ

ゑ延喜式ゑんぎしきの源氏ハも野宮の事ハ物ものかげ形ハ小

柴垣とゑんぎしきの

ちばせま　柴山く富士のちぐらとよそゑる山の半腹以下柴

のゝなりをいふ芝を縄てなしたる

ちばまつ　柴松の実細小なるをいふ也西行物語

柴松のゝぐれちけゝふつゑをぐくこの手よ牡ゝ無なくく

ちばゝり　柴栗の実茅栗也とゝり○一種八ちば栗あり

甚矮短ハゝて實と結ゝり

ちばみゝ　万葉集ハ数見と書り立帖ハこのすゑるとあるを

よゝ拾ゝちあひゝせ

ちばひき　太刀ゝいゝり芝曳の実なるべし又芝摺ゝもいふ

古書ハ外輪とゑゑゝり○相撲の手ハもいゝり

ちばきり　ちばの屋資ハ八仏草生茂ゝりいちゝろゝとも

ちやぶこゝともいゝり

ちばうゝり　ちのちのびてなるゝといゝり

ちばゝなま　山路ハ柴とゝて車とするもゝいゝり堀川百首ハ

嶺高ゝ牛尾山ハ入ひとハ柴車ゝゝゝぐるゝゝり

西土ゝて柴車といゝゝハ柴門をゝいゝ如ゝかりゝゝゝ遠まる

をいゝり

ちばゝ少なゝり　倭名鈔ハ淋病を訓ゝり數涙のゝゝゝ淋瀝とも

でもなゝりといゝりちゝでハちゝだゝりなゝり

ちばゝゝゝべ　芝ゝて馬と競ゝる也新古帖ゝ

駒ちゝつ卅へのゝゝかねの芝ゝゝゝ永日ゝゝハ花やゝゝいゝゝ

ちばかゝれ　蝦夷の俗ハ人ゝ隠ゝんとおゝゝゝ忽形と失ハ

術ひつ芸とちばがそれとしへ通形の術く
ちでこつ面　金葉集よりの面頻起波の歌く○仙覚説小男
波女波の間ちひさき波のこと也とこの面
ちいろばね　四方拜也公事根源よりの小寛平元年より始る
内裡式より弘仁年中ふ起ちこつ
ちばすりこつも　柴摺衣の義山路の躰なり
ちばさせたまへ　山婆の謡より見る暫く坐乃義ちばさなり
△おび　俗より自身髪ゆ事をいふ自鬢ありく栄枯物語
より自ら髪すりこつを自剃と書こつり
ちひひ　倭名鈔ふ瘤とよこつり強根といへるも今こゝと
いこもし
ちひつ　羅山集より我朝年甫寫字者皆稱試筆官家先
儒学士博士之文集未見之宋六一居士有試筆詩唯言試筆
之好悪也とこゝ有されこ遯菴詩集帰有園稿なこより試

筆詩あれハ明儒より起ちこつ成ちこつもいつ○禁裡試
筆の硯水ハ伊勢鈴鹿郡山邊の御井ゆ用ゆらるもの大和
の秋篠寺より献ずるもいつ○紙筆の字ハ荀子よりこゝ
こつり
ちひしハ　椎柴也薪よいつ○椎柴の袖ハ喪の服よちび
の色を用る也といつり又法師ともいつ○ちひちでの山紀
せぬ山といふこいつ○ちでと称する一種の樹あり薩摩椎
の葉より似て夏赤き実あり
や徒然草ちひちでのぬ
ちひこ　涌氏ふ面強殺の義也といつ
△ちか　強又誣とよこつり ちひる也ひる反ふ也續日本紀
宣命萬葉集なこ同し又疆も同し又暴ちよこつり
ちぶみ　伊勢國安濃郡より波見村あり古事無仁記彦坐王
の子より志夫美宿祢王あり神名式よも志夫弥神社こつ面

今社地をゑらふ王と葬せ〜塚ゝ〜所祭三座也
志ふて　新撰字鏡に脯を訓せり臘也と註せり
ぢふ〻　東鑑に乙の俗ふいに米饅頭の事也といへり晋
書に蒸餅上不析十字則不食とゝひ書言故事に蒸餅十
字瓊肌と是也麪餅醴に造るか肉ふ餡を〜長崎に
て市人制すゝんと云
志ゝぎ　習宜と書り古姓也習宜阿曽麻呂あり今の氏ふ
志ひぎと呼り○祝儀をもいへり字尺牘雙魚ようの
志ぶゝ　渋谷城ようの相摸国の地名也元暦の戦義経の
将に渋谷重助あり
志ゝぶゝ　習合と書り神道に儒道を合するもといへど
儒釋道乃三教ともに牽合するゆゑ両部といへども金胎両
部の義ふして神佛の両道ようゝ唯一といへども天人唯一の義
ふして神道唯一教といへばあるす

志ふ〻〻　拯草紙に見る渋ゝの義なるべし
志ぶふま　志ぶる意にて志ぶるさとゝいふ也
志ゝふ孫〻　執念の音也といへり源氏に志ゝ孫き人とゝゑ
ゑり埃嚢抄に詩を引て忍字をよくゝるり或ゝ敦とよめ
り字書に忍と通すといへり辨慶狀に志ゝ孫〻〻てとよめ
る也
志ぶと〻　性質ふいへり著聞集に見る志ひふと記義なるべし
志ぶいち　四分一の義銅四分の一銀を雑るといへり朧銀也
といへり○壁なとふいへも石灰四分の一沈とて法とする也○天
文家の器中もあり星の分野と地平の度を考ふる用〻
志ふもつ　什物と書り後漢昏に出たり什具と同〻
ぢふまつ　十二律也律ハ黄鐘大簇姑洗蕤賓夷則無
射ゆて六律とす陽也呂ハ林鐘南呂應鐘大呂夾鐘仲呂
とゝて六呂とす陰也合せて十二律といへ十二辰ふ應〻十

二月ニ配ス

ちよきやう　永保二年神祇官移文ニ執行社務ニ云々

今京師祇園ハ以ニ是ヲ法性寺の執行吉野の執行ナリ

同ジ

△ちんめい　所々神明社と称スルハ天照大神也漢名乃註ニ

神明ハ日也云々　熱田ニ称スルハ國常立尊也ト云フ　漢

郊祀志ニ東北神明之舍西方神明之墓也ト云フ

△ちやら　風流の意ニちやらさ云ハ洒落の音ナリ

○花肆ニ一種の樹ヲ名ク夏白花ヲ開ク潛確類書ニ云ハ

沙羅樹ニ夏ツヽきともいフなんやの類ニも娑羅樹ナリ

本中木綿の條ニ見タリ又七葉樹一名娑羅樹ト云ヘリ

ちとせ木ナリ云フ今涅槃像ヲ畫クニ多クハ此樹

ちやか　胡蝶花也ト云フ類射干ト云ヘルヲトテ射干

の音と轉訛セルナリ○姫ちやがあり至小也○條

ちやぢやぐ　葉ニ間道アリ

ちやぢやぐ　大雨を如車軸ト譬ヘタルハ法苑珠林ニ見ヘタリ

祖庭事苑ニ淚如車軸ト云ヘリ○艸ニハ葉のあり

さまの似ルヨウニ鳥鳳花也常陸ニとんぼうさと云フ

△ちりこう　如雨露の義花史左編ニ噴壺と云ヘタリ

也ト云フ　こぶうきとも云フ

ちよるん　書院の字唐史ニ西ノ方ニ講学讀書の所アリ

と今ハ云フ對客の所を称ス

○明ニ天下の書院定額アリテ寺觀同前のヽヽあつこのひと

なるよそ明の一統志ニ州郡ニ書院寺觀と書出セリ琉

球の宅室ニも其名アリと云フ

△ちりこう　萬葉集ニ知ルヒヽやはフ冠らしめたり白

糸を孫ヽ緒ニすル意ニ屬けヽるなり上野哥ニ訛ル

ヽをおひヽやまハ小新田山也ト云フ

ちくげくく　古事記ニ竹精ト日本紀ニちくげセトヨメリ

△ちりね　尻居の義尻臀トカヽヲ尻ヲ居ルトイフナリ

ちりぞや　万葉集ニ鈴後ト書テたちのしりさやとよめ

ル毛太刀の同　虎豹猪鹿の皮毛ト表ナシテ鈴の鞘ニカ

けくくる　虎皮尻鞘　水豹（アサラ）尻鞘　唐皮尻鞘　赤皮尻鞘　蛇尾尻鞘

ナドト記録ニ見エタリ○繒の尻鞘トいふあり　絹ニテ尻鞘ト

造リ虎豹の類ヲ畫キ付ルなどいふ　鰐形尻鞘　左筆尻鞘ト

もに管見記ニ見ヱ　大臣公卿以下遠所行幸の時或ハ賀茂

祭石清水臨時祭ナドの舞人何モの太刀ニも入ル也

ちりよたち　伊勢物語ニ日本紀ニ隨後トヨメリ

△ちくしのつくぐ　伊勢風土記ニ標鈴トヨンヒ節刀成ベシ

△ちおき　俗語也為處の義成ベシ　ちハおき乃略おきハ處

置トいふく

倭訓栞中編巻之十終

国立公文書館
National Archives of Japan